

L. ブルーニの「美による統治論」

— (4)アテネモデル、共和政ローマモデルとコムーネモデル —

佐藤 眞典
(2004年9月30日受理)

L. Bruni's theory of "city-state governed by the beauty"
(4) Athene-model, Republic Roma-model and Comune-model

Shinsuke Sato

This paper offers comparative study of Aristides's Panathenaikos and L. Bruni's Oratio de Laudibus Florentinae Urbis. There is no doubt that the latter is formed from three models: Athene-model, Republic Roma-model and Comune-model.

Key words : L. Bruni, Aristides, Athene, Republic Rome, comune, Firenze

キーワード：ブルーニ、アリスティードス、アテネ、共和政ローマ、コムーネ、フィレンツェ

本稿は、これまで公刊した論文「L. ブルーニの「美による統治論」—(1) 古代アテネを模倣した都市・市民論：形的美しさ—」広島大学教育学部紀要 第二部（文化教育開発関連領域）第49号（2000），pp.53-61と「L. ブルーニの「美による統治論」—(2) 市民の心の美しい都市 *beneficentissima civitas*—」広島大学教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）第50号（2002），pp.55-64、「L. ブルーニの「美による統治論」—(3) 正義を重んじる都市 *justissima civitas*—」広島大学教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）第51（2003），pp.15-21で試訳を完成したレオナルド＝ブルーニ著『フィレンツェ市讃美についての演説』（Leonardo Bruni, Oratio de Laudibus Florentinae Urbis）に基づいて、この演説を書くにあたってブルーニが大いに参考にしたといわれているアリスティードスの『パンアテナイコス』との精細な比較研究である。

先行研究にバロン＝シーゲル論争¹⁾とその後の活発な議論²⁾があるが、特にアリスティードスとブルーニの詳細な比較研究については、A. サントウオーソによって行われ、概念構造上ではアリスティードスをブルーニはほぼ継承していると結論付けている³⁾。私は試論的にアテネ、共和政ローマ、コムーネの三つのモデルを参考にしてこの演説を仕上げたものと考えている。本稿では今後の研究のために、余談を入れること

なく、レオナルド＝ブルーニの『フィレンツェ市讃美についての演説』（以下Bと省略⁴⁾）とアリスティードスの『パンアテナイコス』（以下Aと省略⁵⁾）との精細な比較データを作成しておきたい。本稿は比較の検討のみに留めたい。

I. 序言

Bでは「私は以下でフィレンツェ市について語ろうと思う。その都市にふさわしい雄弁さが、あるいは、少なくとも、語る熱意と意志にふさわしい雄弁さが不死の神からあたえられんことを請い願う。」と述べ、雄弁の能力よりも書こうとする意志の重要性を強調して書き始めている。

Aでは、神のおかげで演説のうまさや言葉遣いの的確さはギリシア人に与えられた能力で、アテネ人は「すべての人の養父」、「父のなかの父」である。正しく物事を伝えるにはギリシア語が最適であり、雄弁に伝えうる能力をもつのはアテネ人である。「認識し、分析し、要求に従って完成させる」この役割は幸運、神の助けなしにはできない (Behr, p.9 (1-3))。

AもBも「語る時には一体何を先にすべきか、吟味するのは容易ではない」と書き出しの困難さを指摘し、Bは卓越した事柄が多々あるから困難で、Aでは、古い都市ほど不明確で理解しがたい、「都市はな

ぞである」からとしている。そこで、Bはvisibleなものが説得的であるということで地理と「形として美しい都市formosissima civitas」から記述を開始していく。Aでは書きやすくエラーが少ない、論議の生まれにくい明確なもの、地理的なものから書き始める。人々が生き続ける場を選定し、景観と伝統、神々とともに平和を実現する砦を築き、自然と人類のリーダーとなるに相応しい地が神々によりアテネ人にあたえられたとした (Behr, p.15 (8-9))。

II. フィレンツェはどのような都市か

Bでは、フィレンツェ市民は天性 (ingenio) や光輝さ (splendor) で優れ、思慮 (prudentia), 装飾性 (ornatus), 優雅さ (lautitia), 清潔さ (munditia), 荘重さ (magnificentia) が、即ち、フィレンツェ市民の至高の理性 (Summa ratio) が都市を造るとした上で、地理的な条件を、都市の位置取りの賢明さから書き始める。

1) 地理的位置

Bでは、山と平野の中間に位置し、両方の利点を持つ点、山は北風を遮り、西風を入れる。内陸性の都市の利点や海の危険性・不健康さを避け、アドリア海とティレニア海の両方を利用出来る中間性など具体的に都市立地の地理的条件の得失を指摘しているが、Aでは、海は不安定ではあるが、飼いならして使えば郊外のようなものになる。海と島々は先祖からの財産と位置づけている (Behr, p.17 (11))。気候も暑からず寒からずアテネの気候がベストであるとしている (Behr, p.23 (18-9))。

Bでは、川 (アルノ川) は便利さと快適さとやわらかさを都市に与える点の指摘はあるが、Aにはない。

2) 美の欠けるものなき都市

Bでは、人々の賑わい (市民の多さ・徳力・勤勉さは最高の装飾)、建築物の素晴らしさ (寺院の装飾性→世俗の旧・新、公共物・私邸、生・死)、「美 (装飾性)」は外皮→内側の芯にまで及ぶ、身体を巡る血液の如く、市庁舎 (心臓)→舗装道路 (血液) を通じて→私邸に及ぶ。清潔さ (健康を保障、これなくして都市は存在しえ無い)→身体各部へ浸透していくとしているが、Aでは、盾の如く、美や装飾性の中心はアクロポリスに始まり→アテネ→アッティカ地方→ギリシア全体→大地へと広がる物理的な美の中心と拡大が触れられている (Behr, pp.17-21 (11-18))。

3) ゆとりの楽園=郊外・領域

Bでは、郊外はゆとり (広さ・自由・自然=緑) を保障するし、領域の砦は農民 (食糧の供給者) に安全

を保障するとした。Aでは、海や島々が郊外を形成し、都市アテネの支配下に入るとともに、それを支えていることを指摘しているだけである (Behr, p.17 (12))。

4) 全体の眺望

Bでは、遠景から接近するに従い：村村→町町→郊外→都市へと美は勝る様を明確に描いている。これに対しAでは、各箇所、穀物の分配、祭儀の共有、軍事の際の保護、平常時の援助などで、戦術だけでなく知識、文学、哲学～生活様式までアテネが最高水準を実現し、すべてのものの師となっている (Behr, pp.229-237 (322-331) p.245 (242-346) etc.)。

特に、Bの清潔さについての指摘：「雨水が地上に落ちるより早く、大概、非常に便利な水路にのみこまれていくからである。他の都市では、素晴らしい邸宅の居間 (thalami) でさえ、この都市の道路や広場のよう、清潔で乾いた状態には決してなっていない。真の清潔さをもたなければ、更に装飾された建築物はないし、装飾された建築物がなければ、更に風土の健康さもない。風土の健康さもなければ、更に沢山訪れる人もいない。」と、清潔さの指摘が際立つ。更に、部屋の作りが季節により変えられている点：「冬の部屋と区分して建てられた夏の部屋を眺めること以上に美しく、快適なことがあるか。まさに、これに見事な居間、贅沢な家具、金、銀、被覆、貴重な敷物を加えよう。」などはAの記述にはない細やかさである。

「もし、それらの都市が何か装飾を持っていたとしても、それはすべて外皮に限られ、第一皮相に (primo cortice) 留まる。だから、都市に入るや否や、新しい来訪者はすぐそのことを見抜くのである。しかし、もし人の多いところから離れて、家々の外側ではなく、内側の芯を吟味するなら、そこでは、以前に得ていたほどの評価に耐え得るものはないだろう。例えば、家々の傍らにはあばら屋があり、外側の装飾の傍らの内側には汚物がある。フィレンツェは、しかし、一内側全部を見るのでなければ—その美において理解されえない。従って、他のところでは評価にダメージをあたえることが、ここでは、存分に評価を増すことになる。例えば、壁の中にある少なからぬ装飾性や荘重さが壁の外にもあるし、一つ二つの道路というのではなく、全都市のすべての場所が飾られ、光り輝いている。身体中を駆巡る血液の如く、装飾というものが都市中を巡って広がっている。まさに、建築物の中央に、並外れた美しさと驚くべき贅沢さを持つ砦がそり立っていて、それ自体を見れば、何のために建てられたのかは容易に分かる。例えば、大海軍を例に取れば、その中に他の人々の指揮者がおり、君主である提督が配置されている旗艦というものは容易に知れるであろう。そのようにこの砦のその外形から、そこには

諸々の共和国の (*rerum publicarum*) 舵取りたちが住んでいることを誰もが判断出来るのである。砦は、巨大に建てられ、高く聳え立つので、周辺にあるすべての館よりも広大な土地を見渡し、私邸の破風よりも高くその破風が現れるほどである。とはいえ、私としては、これを単に砦と呼ぶべきでなく、むしろ砦の中の砦と呼ぶべきではないかと思う。すなわち、一市壁から足を踏み出すやどこでも、非常に多くの建物に出くわすので、確かに、それが都市と呼ばれ、市壁に取り囲まれこれは正に砦だと名付けられるべきであると思う。」と述べているBのこの箇所は、すなわち、Aで、アテネがギリシア人の「砦」となってペルシアや蛮族との攻防に凌ぎを削る自負と精神的にはよく似ている (Behr, p.15 (9))。そしてその砦は神々により形成され、そこで行われる祭儀を通じて神々として近隣諸都市と交流する仕組みになっていた。

また、Bでは「都市は、**神官 (antistes)** や**女王 (dominatrix)** の如く、中央にある。自らの場を持ち、そこここに建てられた城塞が [フィレンツェの] 都市を取り巻いている。詩人が、星に取り巻かれた月にうまく譬えて、吟じている如く、すべての眺めは、人々の目には、大変美しい。ある輪が他の輪の周りにある円い盾の面の如く、最奥の輪が中央の臍の中に没し、それが全天空の中心地である。そこで、ここに我々はそれぞれの輪が周囲を相互に取り囲むように回っている輪のような地域を見出す。それらの中にフィレンツェがあり、真ん中の臍に似て、全世界の中心となる。都市自体は市壁と郊外によって取り巻かれ、郊外の周囲には農村の家々の輪があり、それらの周辺には城塞があった。全体の最も外側の地域はもつと円周で取り巻かれていた。」の箇所の神官や女王とか**イタリアの女王 (regina Italiae)** といった表現は、正に、アテネの興りである女神のアテナ神を思い出させる。月と星の喩えや正に、臍を中心に盾のように周辺に輪が広がっていく様はAから学び取った構図といえよう。サントウオーソも指摘している点である⁶⁾。

Bでは、「フィレンツェは海港でないために欠陥がある」と言う点について「海港が必然的に被る沢山の危機がある」と全哲学者中最大の人物であるアテネのプラトンを引用して弁解しているが、むしろ、Aでは、海は不安定だが、飼いならしていけば、豊かさをもたらしてくれるものと受け止めている。そこから多くの物資や人を受け入れていくことになる。アテナ女神が都市の名づけ親になったが、ポセイドンもこのアテネの発展に手を貸していくことになる (Behr, p.39 (41-44))。海と陸とのハーモニーが強調される (Behr, p.43 (49))。

港を持たない都市には何が欠けているかBはずいぶん心配しているが、むしろAは海港を大いなる利点に

している。Bの「フィレンツェの快適さは、不健康な気候、悪臭を放つ汚い空気、水の湿気、又は、秋の熱病 (*autumnales*) によって決して悩まされたり、脅かされたりはしなかった」という指摘は、フィレンツェの海港都市となるピサが常に悩まされ続けたマラリア蚊の弊害に触れているが、この点、まったくAには考慮されていない。アテネは乾燥していて問題なかったのであろうか。

III. フィレンツェ住民はいかなる祖先から由来したか

「今、その [フィレンツェ] 都市そのものが何かは描かれた。次に、その市民たちがどのような種類の市民かを考察しなくてはならない。普通、ある特定の個人を論じる時のように、住民の場合もその起源を調べ、いかなる祖先から由来したか、またあらゆる時代に彼等が本国や他国で何をなしたかを考察しなくてはならない。次の如く信じる。—キケロが言う如く— [何事も] 起源から始めよう。」でBは起源から述べていく。

1) ローマ人の優秀性とその相続者フィレンツェ人

「他の都市住民の祖先は亡命者や祖国を追放された人々であったし、また、農民やどこの馬の骨ともわからない放浪者や名も無い建国者であった。しかし、あなたたちの建国者はローマ人であり、全世界の支配者であり、征服者であった」とBではローマ起源が強調される。この点、Aでは、大地という共通の乳母から生まれ育てられた。Bの基準によると、「どこの馬の骨」を意味することになり、そこで神話による権威付けが必要となる。

「フィレンツェ人は種族的にはローマ住民から興ったと言う事実はとりわけ重要なことであった。ローマ人ほど賢明で、力があり、あらゆる点優秀で抜きん出ている民族は地上にいたであろうか。彼等の偉業が余りにも際立っているのも、他の人々によりなされた最高の業績も、ローマ人の偉業と比較するなら、子供のお遊戯 (*pueriles ludi*) のように見える。ローマ人の支配は全世界に及び、至高の理性 (*summa ratio*) で統治された。今までに他のすべての都市が生み出すよりも多くの有徳の士の模範が単一の都市から生まれた。ローマには、あらゆる分野に有徳の士が数限りなくおり、そのローマに匹敵しうる民族は他にはいない」とした上で、多くの最高の秀抜な指導者や元老院の首領たちの名前を列挙し、「支配の広さを探すなら、武力によって従属しない、また、ローマの権力に屈しない住民は大西洋のこちら側にはいなかった。それゆ

えに、相続権によって、あなたたちフィレンツェ人には、全世界の支配権や相続財産の所有権が属している」とするBの記述に対し、Aでは神々が強調される。神々が選び与えた「不動の炉床」のある「神聖な地」に生活手段である穀物を発見し、その配分、戦争の勝利とその後のアテネ人の徳により最遠地へと支配は拡大された (Behr, p.27-31 (24-31))。

Bでは、ローマを相続したことから、次のことが起こる。「フィレンツェ人により遂行されたすべての戦争はほとんど正義の戦争である。それは自らの領土を防衛し、又は、回復するために必要上遂行した戦争であるがゆえに、この住民が戦争で正義を欠いたことがない。事実、すべての法と権利がこれら二種類 (防衛と領土回復) の戦争を合法と認めている」ということに必然的になる。

Bでは、「歴史のいかなる時点でフィレンツェ人はローマ人から興ったのか」を特に問題とした。そして、「今や、王室の継承の場合、ほとんどの人々によって保守されている慣習がある。即ち、国王の相続人であると最終的に宣言される人物は、その父が国王の権威を持つ時に生まれていなければならない」とした上で、最良で最高に繁栄した状態の時の共和政期のローマを相続したことを強調する。そして「特にフィレンツェの人々は完全な自由を享受し、僭主たち (tyranni) の最大の敵となっている。正にその建国から、フィレンツェはローマ帝国 (imperium) の侵略者や共和国 (res publica) の破壊者への憎しみを学んだ」。そして僭主に対する戦いは今日まで続いているとした。

これに対し、Aでは、「ギリシアで反僭主の唯一の都市はアテネである」、「ギリシアを帝国支配しようとするものはすべて敵である」 (Behr, p.225 (313)) と述べてはいるが、Aはそれほど僭主との戦いを強調してはいない。むしろ、戦いの記述の多いAのターゲットはペルシア、マケドニア、蛮族やギリシアの他の諸都市との戦いが重要になっている。戦いは武器にもよるが、むしろ、戦争に勝利した後、寛大にも敵を許して、徳による支配にウエートが置かれる。これはフィレンツェについても同じことである。Aではこの考え方は一貫している。

もし別の時代に党派が異なった名前と呼ばれたとしても、まだ現実には分裂してはいなかった。フィレンツェは常に一体 (una) であった。ローマ帝国の侵略者に対する態度は、当初から今日まで、常にこうした政策の中で続いてきた。僭主の残酷さやそれへの憎しみや弱点が強調される。

「フィレンツェは、その建国者として、何処でも誰によっても従属され、彼等の徳の力や武器によって支配されるものがすべて帰属する指導力を持っていたの

で、また、自由な不敗のローマ人が権力、高貴さ、徳や才能において栄えた時に都市が建国されたので、この一つの都市がその美しさや、建物や場所の良さで際立っているだけでなく、フィレンツェはまたその起源の権威や高貴さで他の都市を大いに凌駕していたことはまったく疑いえない。」Bのこうまとめられたこの部分はAの書き方に思いはよく似ている。

IV. フィレンツェはイタリアで首位に立つためにいかなる技術を用いたか、都市の徳についてどのようなものが他にあったのか

「フィレンツェがそうした高貴な祖先から生まれたので、不精や臆病により悪に染まることは許されなかったし、その先祖の栄光に浴することや、あるいは、安易に、又、安穩に榮譽の上に胡座をかくことに決して満足しなかった。そうした高尚な位置に生まれたので、フィレンツェは誰もががすることを期待し、望んだことを成し遂げようとした。かくして、フィレンツェはあらゆる徳でその建国者を模倣した。」とあくまでもローマをモデルとしていることを強調する。しかし、度々指摘するように、支配には徳が大切であることはAも同様である。

更に大切なことは「賢明な政治、危機に直面する意志、信用・高潔・不動心の維持や、とりわけ弱い人々 (tenuis) の権利を守ることによってであった。フィレンツェは富によって勝ろうとただけでなく、その勤勉さと荘重さを更に一層高めようとした。正義 (justitia) や人間性 (humanitas) よりも権力 (potentia) で優れているほうがよいとは考えなかった。これらの技術 (artes) に留意して、フィレンツェは首位を占めようとした。」また、「特に、私が語ろうとしてきたことは個々の市民の徳、あるいは優秀さではなく、共和国全体 (universa re publica) についてであることを思い出すべきである。」

「通常、都市全体は住民の大多数が好むことに従う。他の都市では、少数者がより良き部分を打ち倒したのに対し、フィレンツェでは、より良き者がより多数となった。」また、「簡潔に言えば、あらゆる分野、即ち、信頼性 (fides)、勤勉性 (industria)、人間性 (humanitas)、魂の偉大さ (magnitudo animorum) において、フィレンツェに匹敵しうる都市は見出し得ない。「実践的知恵 (prudencia pretermitta) の如く、この都市が示してきた、現在も示し続けているようなめぐみ (恩恵 beneficentia) があつたのだろうか。というのは、こうした特質は出来るだけ多くの人達を支援したように思えるし、すべての人が、特に、そのほとんどを必要とした人達とその都市の寛大さ

(liberalitas) を聞き知っていた。本国を追放され、煽動的陰謀で根無し草となった、あるいは、仲間市民の敵対のため土地を失った人達皆が、フィレンツェの寛大さの評判の故に、全ての人の後見人のもとに行く如く、また、唯一の避難所に行く如く、常にフィレンツェにやって来た。これまで、二重の市民権を持つと考えない人はイタリアにはいない。一つは、本来の生まれた都市の市民権、もう一つがフィレンツェ市の市民権である。その結果、フィレンツェが、事実、イタリアのすべての人にとっての共通の祖国 (communis patria) や全く安全な避難所となった。ここでは、必要なら誰でもやって来れるし、完璧な良き好意と最良の寛容さでもって (summa benignitate) フィレンツェ人に受け容れられる。事実、この国では、寛容さへの情熱と他人への思いやりが大きかったので、これらの特質が大声で叫ばれ、誰にも公然と認められている。このことから、フィレンツェ人の都市が存続する限り、誰も実際に祖国がないとは考えないであろう。

現実に達成された寛容さを示す行為は、表明された宣言よりもより多くのことをねらいとしている。逃亡者が、全く価値のない者でないなら、歓迎されるだけでなく、しばしば現物やお金の贈物で援助される。そのような贈物に支えられて、亡命者は完全な尊厳を持ってフィレンツェに留まり得たし、あるいは、好むなら、自らの本国に帰り、その地に所有権を回復することも出来る。これらのことは事実ではないか。イタリアを良く思わない人でさえ敢えてこのことを否定したであろうか。否、本国では貧困に打ちひしがれ、あるいは、自らの都市を追放された時、公財政でもって (pecuniis publicis) 支援され、フィレンツェ市の良き意志により定住を回復した数えきれない多くの人々によってこの政策は証明されてきた。更に、近隣国家の陰謀、又は、僭主の暴力によって抑圧された時、助言、支援、お金の助けられて、危機を乗り切った多くの都市の例がある。紛争が発生した所へは何処でも対立を調停するために派遣された使節 [の話] は省略しよう。というのは、事実、この都市は調停にその権威を使うことを大いに推進してきた。近隣[諸都市]の快適さのためにそうした多くのことを企てたものが非常に心の美しい慈悲深き (beneficentissima) [都市] と呼ばれるべきではないか。」とした B と考え方は、A でも貫かれている。アテネはその寛大さで、亡命者や逃亡者を受け入れ、保護し、市民権を与えて、同士とした、アテネを共通の家とした、生誕地の都市よりも後者が尊重されたし、故国に帰れる時には帰ることもできた (Behr, p.45 (49), pp.47-55 (52-64) p.209 (294))。こうして共同の安全を図る (Behr, p.209 (294)) とともに、民主的に、穏便にアテネ帝国の法

の下に全員をパートナーとした (Behr, p.221 (308))。そしてアテネは全ギリシアの救世主となることを心がけた (Behr, pp. 223 (312))。現実にはアテネの市民権は開放的なものから、徐々に、そしてスパルタに破れて以後、閉鎖的になっていくが、ローマ時代に書かれた A ではまだまだ開放的に捉えられている。

「フィレンツェは決して他の都市に不正を許さなかったし、又は、他の都市が紛争に巻き込まれている時には愚鈍な傍観者に留まることは許されなかった。第一に、フィレンツェは常に言葉と権威を用いて全力で係争を解決しようとする。また、一可能なら一 困難を調停し、説得して和平を結ばせようとする。しかし、これが達成不可能ならば、より強い権力者に脅かされ、不当に傷付けられている方を常に助ける。かくして、正に当初から、フィレンツェは、弱者 (imbecilles) を保護し、イタリアのほとんどいかなる住民も破壊を被らないように保証することを義務と考えてきた。そのため、フィレンツェは、その歴史では、決して楽しみ欲望に導かれなかったし、恐れのために、ある共和国が大きな損害を被ることを許さなかった。他の都市、同盟者、友邦や中立国が危機にある時、安穩に、又、平穩に過ごす権利を持っているとは考えなかった。むしろフィレンツェは常に自らを奮い立たせ、他の都市の係争を取り上げ、攻撃からそれらを守った。失われると思われるそれらの都市を保護し、軍隊、装備やお金で支援した。」とし、更に、「フィレンツェが大金を投じ、他都市の快適さのために大いに苦勞し、危機にある多くの諸都市を庇護しなかったか。フィレンツェが危機の時にこれらの諸都市を保護したので、彼等は、自然と、フィレンツェを彼等の守護者 (patrona) と認め始めた。」との B の主張に対し、ここまで明確ではないが、アテナ神の助けを得て、武器で平和を実現すると、法で秩序を維持し、一人支配から解放した体制を一言述べた (Behr, p.39 (41-43)) のみで、詳しく B ほど展開していない。アテナ神のように、女神のように、着飾る文化帝国を目指しているのは間違いのない事実で、神と子、先生と生徒といった関係で正義が実現される。神々が陪審員となり、その神々との交流でその正義に従う。最高法廷はアテネのアレオパゴスで実現される (Behr, pp.41-45 (45-48))。

そして、「フィレンツェがそうした守護者となつてから、誰が、品位、実力、勤勉性や権威においてフィレンツェが他の都市を凌いでいることを否定するであろうか。この良き意志と寛大さに更に、この都市が常に破ることなく恒久的に [f. 91v] 保障した同盟者への素晴らしい信頼が付け加えられた。フィレンツェは、同盟関係に入る前に、それが実際に完全な保護を

準備できるかどうか常に注意深く吟味することを、この基本については常に心掛けていた。その結果、フィレンツェが何かに同意した時、決してその約束を違えなかった。そのために、フィレンツェが当初から考え抜き、その訴えが正しいと信じるようになると、批准したいかなる協定、条約、同盟、誓約や約束もフィレンツェに破らせるように影響を与え得るような方便も有り得なかった。その公約をすべて守ると言う評判以外に共和国の品位に適うものは何もない。逆に、約束を破る事以外に悪い事はない。後者は悪い犯罪者の行為で、共和国の最大の敵である。それらは以下のようなことである：「私は言葉では約束したが、心では約束しなかった」。非常に正しい都市 (*iustissima civitas*) なら決して許さないことである」。引用は少し長いが、正義を重んじる都市が強調される。これに対しアテネは戦争に勝利しても、亡命者には市の門を開き、受け入れるだけでなく、ギリシアの正義の審判者となった (Behr, p.258 (361-362))。そしてすべての都市に大使を派遣し、またすべての都市から大使を受け入れ、説得による和解を目指した (Behr, pp.257-259 (370-371))。その際、共通の言語としてのギリシア語が役立つし、アテネ人の演説の雄弁の能力が発揮される。

「そのため、良き都市は常に十分な考察の後に公約を成すべきであった。あるものと一旦約束を成したら、その有効でないものを除いて、変えることを考えるべきではない。信頼と高潔さがこの都市では高度に尊重されてきたので、それは敵との間に交わした条約さえ良心的に遵守した。その結果、フィレンツェは約束を違えたということで非難されたことはない。このため、フィレンツェの敵さえもその都市が条約に基づいて生きていくことを疑わないし、それらの内でフィレンツェの名は最大限の権威をもたらした。若干の人がフィレンツェの最悪の敵であっても、自らの息子と富をこの住民の保護権のもとに喜んで託したのは明らかにその事実の故である。彼等はこの都市の良き信頼と人間性を信じていた。前者は、フィレンツェが約束したことは何でも守ることを保障したのに対し、後者の特性が、フィレンツェ人をしてかつての不正を許させ、すべての適切な奉仕を供給させることをうながすのを知らせた。彼等のその期待には失望はなかった。事実、フィレンツェ人は細心に財産を管理し、それをそれが属す人々に返し、この住民の良き信頼を信じた人々を正当化した。財産をフィレンツェの配慮に任せるといった模範は直ぐに他の人達に見習われた。というのは、この都市は苦勞して、夫々を正当に扱い、あらゆることで、そのあらゆる交渉で方便よりも名誉を重視した。事実、同時に名誉でないものは役に立つものではないとフィレンツェが考えている場合があっ

た。」と名誉を築き、守る政策の一貫性を明確に強調しているが、Aでは追放されたものを受け入れる政策の偉大さと一貫性を一言のべたのみである (Behr, pp.59-61 (71-72))。

「この都市が授けられていると私が見るこれらの多くの立派な特質の中でも、精神の寛大さ (*magnitudo animorum*) と危険を恐れぬ態度 (*pericolum contentio*) ほど偉大で、際立って、あるいはローマ人の徳や性格と一致するものはない。」とBはあくまでもギリシアモデルよりもローマモデルを強調する。

戦争に関しての記述では：Aが圧倒的な記述量で、戦争には攻撃、防御、策略への反撃があり (Behr, p.151 (195))、戦争は将来の安全を求めての戦争であり (Behr, p.99 (126), p.151 (206))、帝国には拡大、維持、縮小の三つの計画がある (Behr, p.157 (207)) などなど豊富な経験を伝えている。これに対し、Bでは、確かに、本文では、「多くの大手柄を語るにはそれ自体一冊の本が必要である」と記述しているが、あまり豊富な経験は語られていない。対ミラノ戦争、対ヴォルテッラ戦争、ピサ対ルッカ戦争の後者への側面支援が語られているのみである。「ローマ人はあらゆる時代に戦争に賭け、無数の争いや大戦闘に従事し、そして彼等は、最大の危機や困難の時でも、決して自らの目的から動揺することはなかったし、自らの高邁な原理を欠落させることを許さなかった」とBではこうしたローマ人の姿勢を学ぶのみであった。「フィレンツェは攻撃された時以外、何人も傷付けなかったけれども、攻撃に曝らされた時でも、都市はその品位を維持するに最も強力な戦士になれることを示した。フィレンツェが攻勢に出る時はいつも、その驚くべき賞賛や栄光への願望に突き動かされた。そのためフィレンツェは常に好んで大きな困難な問題に挑んだ。危険の大きさや問題の困難さの理由で係争を避けることはなかった。」そして「この同じ魂の偉大さ (*magnitudo animi*) で、度々、シェーナ人を打ち倒し、ピーサ人を圧倒し、有力な敵対者や僭主達を打ち砕いた。まだまだ注目すべきことは、フィレンツェが、自らの利益のためよりも、むしろ、他の人達のために軍事的戦闘を企て、しばしば大きな負担に耐えたことである。フィレンツェが他の〔諸都市〕の自由と安全のために多くの危険を冒したことや、自ら自身の財産以外、他の多くの人々の資産を保護したことは、特に、フィレンツェの信頼と名誉に貢献したにちがいない。」「イタリア全体が、一度ならず、フィレンツェにより、奴隷の鎖から解放されたことはいかなる場合にも明白であると思う。…この一つの都市がその軍隊と賢明な戦略でもって彼の権力に抵抗しなかったなら、全イタリアは敵のロンバルディア公の権力下に (*in potestate ligustini*) 落ちたであろう」…「事実、

彼の評判はイタリアだけでなくアルプス以北の人々にも恐怖を植え付けた。彼は物資・金・人に恵まれ、しかし、とりわけ、巧妙な政治的知恵を持っていた。そして、彼は大きな恐るべき権力を持っていた。ロンバルディアのすべてと、アルプスからトスカナやローマニアまでの間の、半島のほぼ全ての都市が彼の支配下に入り、彼の命令に従った。「多くの都市や多くの有力貴族が、恐怖から、あるいは戦利品の魅力に引かれて、或いは、多分彼の策略に乗って、彼の名声と命運に従った」。「そして、彼は他に友人を求めた、金で友人を、高価な贈物で友人を、思いやりの見せかけの約束で他に友人を求めた。不和の種を蒔き、彼はイタリアの全住民の共倒れを狙った。住民がへとへとになると、彼は進み出て、自らの圧倒的な力で住民を征服した。結局、彼の巧妙なやり方は何処でも成功した。このため、多くの政府は、これらの大きな権力を見て、大変恐れ、一時凌ぎをし始めた。しかし、フィレンツェ人の偉大な魂は恐れを知らず、あるいは、その名誉の一部さえ屈服させられるとは考えられなかった。イタリアの自由をその敵から守るのはローマの生き方であることを知っていた。」あくまでもローマモデルに従っている。Aの記述と似ているのは：対ミラノ戦争は、対ペルシャ戦争に酷似している。ペルシャ戦争でアテネはギリシアで全都市の首位に上り詰め (Behr, p.77 (98)), 全ギリシアを奴隷に陥いることから解放し、自由を保障することに成功する。その際、ペルシアやマケドニアは金銀鐵や他のすべての懐柔策で勝利を勝ち取ろうとしたが、アテネは能力、不屈の精神、理性の力を使って勝利を取める (Behr, pp.137 (176-178))。

「その努力と財力によって奴隷となる脅威から全イタリアを解放することほど先人の徳が存続していることをうまく証明してくれるものはない。この結果、この都市は毎日すべての住民からお祝いや賛辞やお礼を受けとっている。しかし、これらのすべての業績は正に不滅の神から授けられたものである。常に一定の謙遜さを持ちつつ、フィレンツェは、その業績をそれ自らの徳 (実力) により得たとするよりも、神の恩寵で (Dei beneficio) 得たとすることを好んだ。その結果、フィレンツェはその成功に奢ることもなかったし、その勝利は、当然の如く、憎んできたものすべてに向けられる復讐を決して伴わなかった。むしろ、征服したものに対しては常に完全な人間性 (summa humanitas) を維持した。そこで、戦争の時にはフィレンツェ人の強力さ (fortitudinem) を知った人々は、勝利の時にはその慈悲 (clementia) を経験した。この都市の最高の徳の内、次の一つが際立っている。即ち、あらゆる時にその尊厳 (dignitas) を維持すること。フィレンツェは偉大な業績を達成する過程でそ

の尊厳を保つことほど関心を払ったものはない。そのため、フィレンツェはその成功に直ぐに奢ることなく、又は、逆の時に落ち込まなかった。成功には謙遜を (modestia in secundis), 逆境には志操堅固を (constantia in adversis), あらゆるものには真の正義と賢明さ (justitia vera et prudentia in omnibus) を保った。この結果、フィレンツェの偉大な名は人々の間で最大の栄光を勝ち得てきた。」とBはフィレンツェが近隣諸都市の首位に立てた理由をこう結んでいる。これに対し、Aは文化帝国になれるようにもつと話しを進めている。アテネは自助努力して、他に頼らない貴族的な尊厳を維持するとともに (Behr, p.139 (179)), 大地とギリシアの確かな自由を求めて戦い (Behr, p.159 (210)), 富よりも貧困を、安寧よりも危険を、寛容よりも正義を選んだ (Behr, p.137 (176-168)), ギリシアの中での首位性を保つ拠点造りの戦いをすすめる (Behr, p.169 (225)), 奴隷による帝国ではなく、人々を解放し自由にする帝国を、説得による帝国を築こうとした (Behr, p.171 (227-228))。勝利しても寛大で、解放的で、徳でもって支配することを心がけた (Behr, pp.171-173 (228-229))。捕虜を解放し、奪ったものをも返還する寛大さを示した (Behr, p.201 (277-279)), 平和を維持する強さだけでなく、寛大であるからこそアテネは人々から祝福された (Behr, p.261 (213))。郷土や都市の共同善のために犠牲となった娘たちを祀りその神社を建立し、その死を名誉あるものとした (Behr, p.71 (88))。現在は将来の踏み台であり、神々との交流を図った (Behr, p.149 (192-193))。神々への感謝のため、ゼウスの祭壇を設けた (Behr, pp.143-145 (186-193))。祭礼で都市の権威と装飾性を高め、体育会や音楽会を開催して、すべての人々が楽しみ、王冠を被り現在の幸福感に浸った (Behr, p.177 (233-234))。

V. フィレンツェは習慣や国制についてはどう賞賛さるべきか

フィレンツェ市が外政面で首位に立てた理由がのべられたが、この章では、その習慣や国制の内政面から述べられている。「このような物事の秩序ある、整然とした、ハーモニーのある都市は他の何処にも見出だせない。ハーブの弦には均衡がある。そこで弦が強く締められると、異なった音からハーモニーが生まれる。耳にはこれ以上甘美な、又は楽しませるものはない。同様に、こうした非常に賢明な都市はその部分、部分のすべてにおいてハーモニーを持っている。そこから明快で偉大なハーモニーのある立法が生まれる。そのハーモニーは人々の目と魂の両方を喜ばせ

る。そこには、均整のとれないものはないし、不適切なものも、不調和なものも、不明瞭なものもない。あらゆるものがその適切なる場を占めている。それは明確に枠付けされているだけでなく、他のすべての要素と正しい関係を保っている。ここには秀でた役人層と行政長官がおり、秀でた裁判官がおり、秀でた社会階級が存在している。これらのそれぞれが一あたかもローマ人護民官たちが常に皇帝に仕えたかの如く— [フィレンツェ市]の至高の権力(*summa [potestas]*)に仕えた。何よりも第一に、その都市では、法(*ius*)が最も神聖視され、とりわけ大いなる配慮が払われた。と言うのは、法なくしては都市はありえず、それなしではフィレンツェは都市と呼ぶに値しない。次に、自由への配慮がある。この自由なくして生命は生きるに値しないとさえ、この都市の偉大な住民は考えた。これらの二つの原理は、ほぼ一つの刻印又は目印の如く、フィレンツェ政府が造っている制度や条例に付け加えられている。事実、法を執行するために行政長官が造られた。長官には、犯罪者を罰し、法を犯す勢力がフィレンツェ市に蔓延しないように保障するために、支配権力(*imperium*)が付与された。

このようにして、個人も下層の人々もすべて長官には従い、これらの役職のシンボルに相応しい敬意を払わなくてはならない。最高権力(*summa potestas*)が託された法の担い手たちは、市民の保護に(*custodia civium*)ではなく、僭主の地位(*tyrannidem*)が彼らのもとにいかないように配慮してきた。これらの行政長官が他の人々の上に踏ん返り返ることがないように、又、フィレンツェ人の最高の自由(*summa libertas*)を掘り崩さないように、多くの配慮がなされている。主として、王国の実権(*vim regie potestatis*)を掌握していると見られる最高の行政長官職(*supremus magistratus*)はその[チェック・アンド・バランスの]保障(*cautela*)で管理され、そこで、長官は、一人ではなく、九人おり、任期は一年ではなく、二か月である。この様に統治方法は工夫され、多数派が判断の過ちを是正し、役職期間の短さがいかなる傲慢さの発生をも制御するので、都市国家共同体(*respublica*)はうまく統治される。」Bの全訳を既に前の論文で公表しているの、以下省略するが、Aはほとんど内政面については記述していない。アテネは正義の種も、生活と統治のあらゆる手段も神々から受け取り(Behr, p.41 (45)), 法は神々から付与され(Behr, p.265 (382)), 君主政, 民主政, 貴族政など政治のあらゆる制度がアテネから生まれ、こうした統治権力の正しい使い分けでアテネは頭角を現した(Behr, p.268 (389))。Bでは内政面での出だして、ハーモニーの重要性が強調されているが、Aでは、意見の相違や不一致があっても、相互に容易に

認め合う和合と信頼関係が都市をリードしていく大切さが強調されているのみで(Behr, p.271 (393)), 詳しい議論は行われていない。

都市の行政区分(普通は四区分)、その代表者の選出方法、古い市民資格の証明の必要性などが詳しく記述され、更に、「共同体統治の仕事が一人の人に託され、その人は同じ区から輪番で(*per vicissitudinem*)選ばれる。彼は合議機関(*collegio*)の首位者で、不法者に正義を守らせるシンボルの旗[f. 96v]を担う。フィレンツェの統治が託される九人は市庁舎(*publica arce= Palazzo Vecchio*)以外に住むことはならず、都市を統治するにより良き位置にいる。彼等は官吏の行列(*lictorum pompa*)を連れることなく公に現れない。というのは、彼等の権威が尊敬をもって迎えられるためである。事実、時折、より大きな議会の必要が生じる時には、九人のプリアーリと公共の問題について議論するため十二人の選良達(*viriboni*)が加えられる。別に、これらに、次のものたちが、即ち、武器を持って正義を守る必要から、全住民が支持し、従う若者組の旗手(*iuventutis signiferi*)が加えられる。これらの旗手は議会のメンバーで、より高い官職と同様に、四区から選ばれ、四カ月の任期を持つ。しかし、これらの三つの合議機関はすべての問題についての決定権を持っていたわけではない。非常に多くのことが、まず、これらのものに承認されてから、最終的に住民議会(*populare consilium*)と一般議会(*commune consilium*)に付される。

多くの人に係わることは法と道理に従って多くの人の判断によって決められるべきである(*quod enim ad multos attinet, id non aliter quam multorum sententia decerni consentaneum iuri rationeque iudicavit*)。こうして、この最も聖なる都市において、自由が栄え、正義が維持される。しかし、こうした組織の中では、多くの人の判断に反対して、何事もいかなる個人の気紛れでは決められない。これらの人々が政府を監視し、[積み上げてきた慣習]法(*jura*)を保持し、[上から与えられた]法(*leges*)を撤回し、平等を保障する。法的手続きに従って正義を施行する権利は、また、特に、剣で懲らしめる権利(*revocando dicendo gladioque exequendo*)は、市民ではなく、遠くから都市に招かれた異国の少数の役人にあたえられている。この習慣は、フィレンツェ人が判事として働くことを知らない理由からではなく(事実、彼等は多くの都市でこの資格で毎日雇われている)、むしろ、その司法制度から、市民達の間から反目や私闘が起こらないことを保障するためである。」と詳しく僭主を生み出さない仕組みや和合が保たれる仕組みなどのように十分に警戒され配慮された共和政的なコムーネの原理が語られる。

「常に、正義は用意され、役人は職に就いており、裁判所、最高裁判所 (summa tribunal) でさえ開かれていた。あらゆる階層の人が最も自由に裁判に訴えることができる、法は賢明に、健全に作成され、市民達を救済するようになっていた。誰にでも平等に開かれたよりおおきな正義が存在する場所は他に地上の何処にもない。自由がそんなに活発に成長する場所は他に無い。そのように平等に金持ちと貧乏人がおなじように扱われる場所は他に無い。この点、誰もがフィレンツェの偉大な知恵を認め得る。多分、他の都市よりも偉大である。大変有力な人が、その富と地位に基づいて、弱者を攻撃したり、又は傷付けたりする時、今や、政府は進み出て、金持ちから重い罰金を取り立てる。人々の地位が異なっているように、人々の罰が異なっているのは道理に一致している。最も必要な人が最も助けられるべきであるということはその正義と賢明さの理想に一致していると都市は判断してきた。

そのため、異なった階層は一定の平等の感覚に従って扱われる。上層階層はその実力によって、下層階層は国家共同体によって守られ、厳罰の恐れが両者を守る。このことから、より有力な市民が下層階層のものを脅かした時には、彼等に対して次のような声がかかる。その場合、下層階層のものが「私もフィレンツェ市民である」と言う。この言葉で、貧しい人達を、弱者というだけで何人も彼等の中傷してはならない、或いは、有力であるというだけで何人も害を他人に及ぼすべきでない、ということを指摘し、明確に警告しようとしている。むしろ、フィレンツェ国家共同体自体は力のないものを保護したので、あらゆるものの条件は平等となった。この様にして、フィレンツェは、自国市民だけでなく、異邦人 (peregrini) をも保護した。ここでは、市民であろうが、異邦人であろうが、何人も危害を加えられない。フィレンツェは、各自それぞれの生活ができるように、保障する努力をしている。更に、フィレンツェでは正義と平等の精神が市民の間に寛容と人間性を促進する。」これらの記述はわれわれ現代人の理想的な国家観や平等感覚をすでに表明している。この考え方がどこに由来するのか興味深い今後の課題である。Aの記述はまったく内政については言及していない。いろいろな制度的な試みがアテネでなされたことの指摘のみでは比較に限界がある。

Bはこの点まったく別のモデルを参考にしていると言える。それはイタリアの都市コムーネがこれまで専制者を生み出さないように改良に改良を重ねながら工夫をこらしてきたものである。

VI. 演説の締めくくり

「彼等のスピーチの説得的なことや演説のエレガン

トさについて私は何を語るべきか。事実フィレンツェ人はこの分野では指導的である。イタリアのすべての人が、最高の明快なスピーチができるのはこの都市だけだ、と信じている。うまく正確に話そうとする者は、皆、フィレンツェ人のスピーチ・マナーに従う」とBは述べているが、これは正にギリシア語で文化帝国を築こうとしたアテネ人の演説のうまさの模倣である。Bの締めくくりの言葉は「終りに、アレツォ人レオナルドの本『フィレンツェの讚美について』は神に感謝申し上げる」であるが、これに対し、Aの表現は「この演説は汎アテネの祭り飾りのアテナ神の衣のように語られてきた」と述べられ、模倣されたAの作品のレベルの高さをも示している。

まとめ

ブルーニの作品は、文学研究科でラテン語講読の授業に使い、また、前野 (旧大田) やよい氏と凡そ三年間に渡ってこつこつ読みこんでいった際、私がワープロにまとめたものを基礎にしている。このまま、眠らせて置くには惜しい作品であるので再検討を加えて翻訳を紀要論文として前号までに公刊した。これで私の役目は終わりにしようと思ったが、訳している内にアリストイーデスの『パンアテナイコス』をどれだけ参考にしたかどうしても明らかにしておきたくなった。

サントウオーソによると、Aの作品のアテネの場合には、中心のアクロポリス—アテネ—アテネ領域—ギリシア—大地へと、Bの作品のフィレンツェの場合には、市庁舎—フィレンツェ—市壁—郊外—田舎—町町—領域という風に影響圏が拡大する構図が模倣されていると見ている⁶⁾。前者は中心点に平和と秩序の常に安定的な拠点を創り、戦争の勝利だけでなく、その後のアテネ人の徳をもって、また、ギリシア語、演説のうまさ、説得のうまさ、祭り、体育会や音楽会でもって幸福感やアイデンティティを共有しつつ支配権を拡大する文化帝国を築いていく構図が、後者は、美や装飾性で、正義と自由の保障で、近隣都市への誠実さや弱いものたちへの優しさでもって同盟圏や影響圏をイタリア全体に拡大していこうとした構図が読み取れる。これはいわゆるブルックハルトが言うところの「生の法則」による支配、権力や宗教イデオロギーの強制による支配ではなく、アテネ人、共和政期のローマ人やフィレンツェ人の徳に共鳴した人や都市を結集していく支配である⁷⁾。

このブルーニの作品の残存写本は現在43 (イタリア語写本1を含む) ある。440写本、91印刷本が残存する聖パシリウスの『青年への書簡集』やアリストテレスの作品ほど多くはないが⁸⁾、コルツォ=サルターティーのグループで発表され、議会や権力に近い

ところで読まれた形跡もあり、死後墓碑がサンタ＝クロチェ寺院に安置された事実からして、その後のフィレンツェの都市創りにはなにかの影響を及ぼしたものと考えられる。ブルネレスキが聖堂のドームを建てるまでまだ40年以上待たなくてはならないが。

比較に際し、全訳を付けているにも拘わらず、ブルーニの作品の方を再度大幅に引用した。それを読んでもいただければ分かる通り、ⅠとⅡは、その当時としては、新しい部分である。『パンアテナイコス』を、即ち、ギリシアモデルを参考にしていることは明らかである、しかし、フィレンツェの実態に合うようかなり創意・工夫されているのも歴然としている。ⅢとⅣは当時のペトルカやサルターティーのグループ内ではありきたりのモデルである。共和政期のローマを礼賛するモデルを参考に書かれている。またⅤは中世の都市コムーネの形成・発展の原理を大いにとりいれている。

【注】

- 1) H. Baron, *Crisis of the early Italian renaissance: Civic humanism and republican liberty in an age of classicism and tyranny*, Princeton 1955. J. E. Seigel, "Civic Humanism" or Ciceronian Rhetoric? The Culture of Petrarch and Bruni, in *Past and Present* 34(1966). *Oratio de laudibus Florentine urbis*, Vittorio Zaccaria, Pier Candido Decembrio e Leonardo Bruni, in *Studi Medievali* 3rd. ser 8, 1967, pp. 529-54
- 2) 日本における根占猷一氏や石坂尚武氏の自由論や市民的ヒューマニズム論などの研究は次の機会に言及するとして、最近の研究論評を少しだけ挙げて置くとするなら: J. Haskins, *Rhetoric, history and ideology: the civic panegyrics of Leonardo Bruni*, in *Renaissance Civic Humanism, Reappraisals and Reflections*, Cambridge 2000. pp.143-177; The "Baron Thesis" after forty years and some recent studies of Leonardo Bruni, in *JHI* 56 (1995), pp.309-338; Leonardo Bruni, *History of the Florentine People*, vol.1(books I-IV), ed. and trans. By James Hankins, Harvard Univ. Press 2001. その他: *Renaissance Humanism: Foundation, forms and legacy*, 3 vols, Univ. of Pennsylvania Press 1988
- Leonardo Bruni cancelliere della repubblica di Firenze, *Convegno di studi*, ed. P. Viti, Firenze 1990. *Leonardo Bruni e Firenze: Studi sulle lettere pubbliche e private*, Roma Bulzoni 1992
- 3) A. Santuosso, *Leonardo Bruni: A reassessment of Hans Baron's thesis on the influence of the classics in the Laudatio Florentinae Urbis*, in *Aspects of late medieval government and society*, ed. by J. G. Rowe, Univ. of Toronto Press 1986
- 4) *LEONARDO BRUNI ARETINI ORATIO DE LAUDIBUS FLORENTINAE URBS*, Hans Baron, *From Petrarch to Leonardo Bruni*, Chicago 1968, pp.232-63. *Panegyric to the City of Florence*, trans. by Benjamin G. Kohl in B. G. Kohl & R. G. Witt, ed. *The Earthly Republic, Italian humanists on government and society*. Pennsylvania U. P. 1978, pp.135-175. *The humanism of Leonardo Bruni. Selected texts. Translations and introductions by G. Griffiths, J. Hankins and D. Thompson*, New York 1987 pp.116-121. (この文献は *Oratio de Laudibus Florentinae Urbis*, の後半の四分の一、即ち、都市制度の個所しか英訳されていない、上記のものと同じである) 上記の諸作品を参考にした。
- 5) アリスティーデスの『パンアテナイコス』については *Aristides in four volumes, I Panathenaic Oration and In Defence of Oratory*, Text and Translation by C. A. Behr, Harvard University Press 1973 を使用している。
- 6) A. Santuosso, *ibid.*, p.32
- 7) ブルックハルト著藤田健治訳『世界史的諸考察』二玄社 1981年 31-32頁
- 8) J. Haskins, *Rhetoric, history and ideology: the civic panegyrics of Leonardo Bruni*, in *Renaissance Civic Humanism, Reappraisals and Reflections*, Cambridge 2000. pp.143-177